

「和紙の魅力再発見」～世界に誇る日本の紙～

2017年6月1日（木）実施 JGA 第一支部研修終了レポート

6月1日（木）13:30～16:30に、第一支部「和紙」研修が実施されました。「和紙ソムリエ」、「和紙キュレーター」としてご活躍されている株式会社杉原商店社長の杉原吉直氏を講師にお迎えし、総勢35名（JGA正会員33名、運営委員2名）、遠路はるばる大分県、愛知県からもご参加頂きました。



講義内容は第一部（13:30～14:40）「和紙のいろは」（材料、種類、特徴）、第二部（14:55～16:00）「和紙の今までとこれから」（使われ方と可能性）。麻を原料とした製紙技術は2200年以上前の中国に起源を持ち、1400年ほど前の飛鳥時代に日本に伝わりました。日本では楮（こうぞ）、三桮（みつまた）、雁皮（がんび）といった、麻よりも柔らかい繊維を原料として使用し、和紙として日本ならではの発展を遂げました。人間国宝に指定された方達は今も1400年前と同じ製法を伝承し続けているというのには、皆さん驚かされていました。また、和紙はそれぞれの材料によって、特徴も用途も違ってきます。更にかつては、越前奉書のように、特定の身分の人しか使用できない紙もあったとのことでした。また、和紙と洋紙との違いについてもお話しされ、和紙は原料の繊維が5ミリから10ミリと洋紙に比べて長く、しかも繊維同士が弱い水素結合をしており、全体として強く丈夫な紙になります。和紙は水に濡らすと結合が弱まり破れやすくなりますが、乾燥すると再結合して元通りになるという特徴の原理は驚きでした。

そうした和紙は17世紀のオランダの黄金時代に活躍し、「夜景」で有名な「光の魔術師」、レンブラントも銅版画で愛用したとのこと。微妙な光と影の諧調を表現するのに、水にぬれた状態でも強度を保ち、油性インクの吸収が良い雁皮紙の良さが受け入れられたようです。更に1867年のパリ万国博覧会で浮世絵が紹介された後、1900年にも和紙が出品され話題になりました。



今では、和紙はインテリアにも利用され、国内外のホテル、店舗やデパート、更には銀行、ニューヨークの寿司バーでも利用されています。世界的に有名なアーティスト、リチャード・セラ氏からの注文もあるそうです。



そうした和紙の変遷を知り、最後の質疑応答では50分間にもおよび色々な視点からの質問があり、皆さんの「和紙」への関心の高さをうかがい知ることが出来、大盛況のうちに終了いたしました。